

Title	近代フランス文学と「東方紀行」
Sub Title	Le "Voyage en Orient" dans la Littérature française
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.118(257)- 125(250)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2003年度藝文学会シンポジウム 「Wish you were here! : ヨーロッパ文学と旅」
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 近代フランス文学と「東方紀行」

小倉 孝誠

19世紀フランスの作家たちはしばしばオリエントに旅し、その見聞を旅行記としてまとめ、ときにはオリエントを舞台とする小説や詩を書いた。シャトブリアンからネルヴァルを経てフローベールやピエール・ロチに至るまで、「東方紀行」を執筆した文学者は少なくない。旅の体験が作家の想像力を刺激したのは19世紀が初めてではないが、オリエントへの旅が特権的な身ぶりとして文学風土のなかに定着したのはまさにこの時代であった。

たとえばマクシム・デュ・カンは友人フローベールと一緒に、1849年オリエントに向かって旅立った。マルセイユで客船「ナイル号」に乗り、エジプトのアレクサンドリアには11月15日に到着する。その後エジプト、パレスチナ、トルコ、ギリシア、イタリアを巡り、その旅はほぼ2年間続いた。フランスに帰国してから、フローベールは『東方旅行記』を執筆し（草稿の段階にとどまった）、他方デュ・カンは『エジプト、ヌビア、パレスチナ、シリア』（1852）と題された写真集と、旅行記『ナイル河』（1854）を刊行する。本稿では主としてデュ・カンの旅と作品に依拠しつつ、19世紀フランスの作家にとってオリエントが何だったのか考察してみたい。

それにしても19世紀半ばという時代にあつて、なぜ彼らはかくも長期にわたる東方への旅に出たのか。なぜエジプトなのか。そこには当時の文化的、政治的情況が密接に絡んでいた。

### オリエントの誘惑

18世紀の末、ヨーロッパ人のオリエントにたいする認識をおおきく変える事件が起きる。1798年のナポレオンによるエジプト遠征である。革命によって王政を倒して共和政を樹立したフランスは、他のヨーロッパ諸国と

交戦状態にあった。そのときイタリア戦役で次々に勝利を収めて台頭してきたナポレオンが、エジプトを攻撃し支配下に置くことによって、主要な敵であるイギリスに軍事的、経済的な打撃をあたえることができると提言した。こうして1798年5月、南仏トゥーロン港から五万人にのぼる遠征軍が出発する。その遠征軍にはエジプトの地勢、風俗、宗教、古代遺跡などについて学術調査することを目的として、幾何学者モンジュ、動物学者ジョフロワ・サン＝ティレールをはじめとして、200名近くの学者、技師、画家などが含まれていた。彼らは古代の記念建造物をくわしく写生し、測定し、住民の習俗や生活様式を図版をまじえて記録し、産業、政治体制、税制度を研究し、エジプトの動植物相、地質、水質、地理、気候を調査した。その成果はやがて『エジプト誌』全20巻（1809-1822）として刊行される。それがフランスのみならずヨーロッパ全体におよぼした衝撃はおおきく、ここに近代的なエジプト学の基礎が築かれたのである。

エジプト考古学の発達は、文学や芸術の領域にも無視しがたい影響をおよぼす。

18世紀までオリエントは探検と冒険の対象であったが、19世紀に入っからはむしろ学問や夢想や想像力の対象に変わる。かつては探検家や宣教師がオリエントについて語ったが、今や考古学者が古代文明を論じ、作家が東方旅行記を綴り、画家がオリエントの風物を描くようになったのだ。それにともなって、オリエント＝東方という名称が指し示す範囲も拡がる。エジプト、トルコをはじめとする中近東や、インド、中国などのアジアはもちろん、アルジェリア、チュニジアなど北アフリカ諸国までが、この名称によって包摂された。さらには、19世紀初頭までオスマントルコ帝国の支配下にあったギリシアまでが、西洋文明の一部であるにもかかわらず、当時のヨーロッパ人の集合心性にはオリエントの一部として異国趣味をかきたてた。デュ・カンの旅と旅行記は、このように多様な文化的趨勢が交錯するところで生みだされた産物にはかならない。

オリエントへの関心は、まず絵画のモチーフとして現れた<sup>10</sup>。エジプト遠征中フランス軍兵士のあいだにペストが蔓延した際、ナポレオンが収容

施設に患者たちを慰問して励ましたというエピソードにもとづく、戦争画家グロの《ヤッファのペスト患者を見舞うボナバルト》(1804)、オスマントルコによるギリシア人迫害を描いたドラクロワの《キオス島の虐殺》(1824)、同じく聖書に題材をえた《サルダナパロスの死》(1827)は、歴史画の構図のなかにオリエンタリズムを映し出す。ドラクロワにはまた、アルジェの人々を素材にした風俗画もある。他方、彼のライバルだった新古典派のアンゲルもまた、《グランド・オダリスク》(1814)をはじめとするトルコ後宮の女性を描いた裸婦像によって、東方の誘惑を証言している。

絵画以上にオリエントの魅惑に引きつけられたのは、文学である。

この領域では、ロマン派のシャトーブリアンが先鞭をつけた。1806年7月から翌年6月までほぼ一年間にわたってイタリア、ギリシア、トルコ、エルサレム、エジプト、そしてチュニスを巡った彼は、帰国後『パリからエルサレムまでの旅』(1811)を刊行する。初版の序文で述べているように、シャトーブリアンは初めから旅行記を草するつもりで旅に出たわけではない。この著作を旅行記ではなく、彼の人生の一年間を語る回想録と見なしてほしい、と読者に懇願しているくらいだ。それにもかかわらず、『パリからエルサレムまでの旅』は東方旅行記の祖型を形づくり、その後オリエントに出かける作家たちが常に参照する文学的ガイドになった。どの地域やどの都市を訪れるべきか、そこで何を見るべきか、そして現代の観光旅行の感覚からすれば旅というにはあまりに長いその滞在期間といった細部にいたるまで、この書物は強い磁力をおびた作品として後続の作家たちの感性と行動を規定したのである。

こうしてシャトーブリアンの足跡を辿りなおすかのように、1832-33年にはラマルチーヌが妻と娘を伴って東方への旅に出立し、1842-43年にはネルヴァルがエジプト、シリアなど中近東を巡り歩き、それぞれ旅行記を発表する。19世紀後半まで視野に入れるならば、コンスタンチノーブル(イスタンブール)滞在記を著したゴーチエ、エジプト紀行を記したフロマンタン、さらにはトルコやエジプト滞在の体験をもとにして、そこを舞

台に展開する物語を綴ったピエール・ロチの名を挙げることができよう。したがってフローベールとデュ・カンが1849-51年に地中海沿岸を巡歴し、旅行記（それが出版されたものであれ、未刊のものであれ）を執筆したのは、いかにも19世紀フランスの文学風土に似つかわしい行為だったということになる。

作家がオリエント紀行を書くということは、それ以前からあった。しかし「東方への旅 *voyage en Orient*」が、ひとつの文化的身ぶりとして特権化され、作家が作家になるために経なければならぬ一種の通過儀礼、あるいは作家であり続けられることの証明としての価値をおびたのは、19世紀の特徴だったと言えるだろう。それは他の諸国に比して、とりわけフランスで顕著な現象であった。

19世紀は「起源」の探究に魅せられた時代である。哲学者は言語の起源を、歴史家は民族や国家の起源を探ろうとした。考古学者は古代遺跡の発掘につとめ、博物学者は植物の系譜をたどり、動物学者は地層と化石に依拠して動物の進化を明らかにしようとした。ダーウィンは『種の起源』を、ルナンは『キリスト教起源史』を、テーヌは『現代フランスの起源』を書くことになるだろう。19世紀の西洋人は起源を探ること、過去に遡ることこそが真理に至るための方策だと信じていた。

そのような情況のなかで、地中海東岸への旅は文明そのものの揺籃期を垣間見ることであり（エジプト）、西洋文化の源のひとつに立ち会うことであり（ギリシア）、キリスト教発祥の地を目にすること（エルサレム）にはかならない。オリエントはたんに異国趣味を満足させてくれるだけではなかった。多くの文学者にとって、それは神秘と宗教性に満ちた聖なる地として霊的な探究の対象になりえたのだ。また他方で、近代の都市文明に疲弊しはじめた西洋人から見れば、オリエントは感覚的な充足と、精神的・身体的再生を約束してくれる空間であり、オリエントへの旅は新たな生の源にみずからを浸すことでもあった。文学史家ジャン＝マリー・カレはいみじくも、「オリエントとは作家たちの魂の知られざる領野にはかならず、彼らは自己を発見するために旅立った<sup>④</sup>」と指摘している。自分探

しの放浪の旅、そして自分探しのために「他者」と遭遇する旅。東方旅行は作家が作家になるためにくぐり抜けねばならない一種の通過儀礼だったというのは、そのような意味においてである。そしてデュ・カン、そのことをよく自覚していたはずである。

### 『ナイル河』の主題と構造

1798年のエジプト遠征は近代エジプト学の端緒になったばかりでなく、エジプトの近代化を促進したと言われる。当時のエジプトは、コンスタンチノーブルに首都を置くオスマン帝国の支配下にあったが、フランス軍やそれを破ったイギリス軍の威力を目にして、みずからの後進性を思い知らされた。オスマン軍の部隊長だったムハンマド・アリーは1805年、民衆の支持を得てエジプト総督の地位に上りつめると、実質的には独立した国家として近代化への道を歩みはじめる。対内的には西欧式の軍隊を導入して富国強兵政策をとり、殖産興業をおし進め、対外的にはパレスチナやアラビア半島に進出する拡張主義を打ちだした。ヨーロッパ諸国は、エジプトの親西欧的な姿勢を評価したが、その急激な発展がみずからのオリエン特進出の利害と対立したため、エジプトへの内政干渉を強めるようになっていた。そうしたなか1849年夏にムハンマド・アリーが死去し、孫のアッバース・パシャが後継総督の地位に就いた。デュ・カンがエジプトに足を踏み入れたのはそういう時代である。

デュ・カンの場合エジプト旅行は、写真集『エジプト、ヌビア、パレスチナ、シリア』と旅行記『ナイル河』という、二つの相互補完的な作品を生み出した。写真集は遺跡の考古学な記録であり、対象の選択にデュ・カンの関心が現れているにしても、彼自身の感想や印象については何も教えてくれない。写真家としての彼はもっぱら記録者としての役割に徹したのだった。他方『ナイル河』のほうは、彼の友人で作家のテオフィール・ゴーチエに宛てた一連の書簡という形式を借りて、作家が一人称で旅の印象を物語風に綴った作品である。デュ・カンはときに、自分が感じた快楽や喜びを熱烈な言葉で吐露することがある。たとえば次のような一文。

私は河に両手を突っこんで、ナイル河の水をたっぷり一口飲み干した。しかも、うやうやしく熱意をこめてこのさりげない行為をおこなった。それまでの人生でもっとも強く抱いてきた夢のひとつを実現したのだった。あまりに広いので古代人が長い間《大洋》と呼んだあのナイル河をついに見ることができて、私は幸せだったし、感動していた。幼い子供の頃、私はエジプトの地図の上に横たわり、小さな黒い網目で示されるナイル河の無数の蛇行を目で追ったものだった。ナイル河はとても美しく、宏大で、鱷が棲息する小島が点在し、大きくて、肥沃なものだと空想していた。間違っただけではなかったのだ。6カ月の間、私は船に閉じこもってナイル河を上下し、そこで生活したのだ。毎日夜明けから夕暮れまで、ほとんど海岸のように広い河岸を見つめていたのである<sup>9)</sup>。

しかしこうした昂揚の瞬間は稀で、一般にデュ・カンには禁欲的な姿勢を崩さない。とりわけ、フローベールの『東方旅行記』と異なり、官能やエロティシズムに関する記述は厳密に排除されている。

あらたな町に到着するたび、デュ・カンはその町の歴史、地誌、遺跡、記念碑などについて縷説する。読者がそこに感じとるのは、遺跡や神殿を正確に位置づけ、彫像のあらゆる造形的細部（高さ、幅、神々の位階）を把握しようとする旅人=考古学者のまなざしにほかならない。デュ・カンは東西南北の方位、角度、大きさなど、建造物や記念物の考古学的な枠組みとなるような要素を、執拗なまでに記していく。彼の撮った写真が遺跡と記念碑の外観を正確に復元してくれたように、『ナイル河』の語りはそれらに関する豊富な情報を提供してくれるのである。

この特徴があざやかに看取されるのは、ピラミッド登攀の様子と、頂上から見た砂漠の景観を描写したページであろう。19世紀のオリエント紀行においては欠かせないシーンである。デュ・カンとフローベールはともに、この挿話をかなり詳しく語っている。フローベールは色彩と光の戯れにた

いしてきわめて敏感であり、その戯れが引き起こす景観の変化を鋭く知覚する。空と大気の微妙な色合いのニュアンスを捉える。他方、デュ・カン  
の関心を惹きつけるのは形や、輪郭や、大きさや、地理である。彼はもの  
の寸法と距離を細かく記述する。フローベールはまるで後の印象派の画家  
のように視線を機能させ、絵画的な描写をする。その旅行メモは、表現手  
段こそ異なるものの、画家のデッサン帳を想起させる。デュ・カンのほう  
は、土地を調査する技師のように周囲の光景を見回し、いわば測量図を作  
成する。フローベールがみずからの情動の奔流に身をゆだねるのに対し、  
デュ・カンは地形学的な枠組みのなかに現実を取りこもうとする。

当時のエジプト社会にたいして、作家が厳しい判断を下すこともある。  
『ナイル河』の語り手は、ムハンマド・アリーの欧化政策をほとんど評価  
せず、エジプトの衰退を嘆き、その凋落が遠くないことを危惧する。「エ  
ジプトは生命の火がしだいに消えていく瀕死の国だ。ムハンマド・アリー  
はエジプトの真の使命を急に変えようとして、死の苦しみを早めたにすぎ  
ない」(p.79)。古代エジプトの繁栄と現代エジプトの頹廃、過去の壮麗な  
文明と現代のみじめな凋落。すでにロマン主義時代から、オリエントに  
やって来たヨーロッパの旅人は皆そのような対照を強調することを忘れな  
かった。矛盾にみちた二重性を説話化することが、ヨーロッパの作家に  
よって書かれた東方旅行記の主要なレトリックだったとさえ言えよう。

オリエント全体がそうであるように、エジプトもまた土台を掘り崩  
され、頂上を削られて崩壊しつつある。西欧の慣習を誤解し、西欧の  
思想を愚かに適用したせいで、コーランが生みだした不動で宿命論的  
な古い文明は死滅しようとしている。オリエントは西欧と交わったと  
き、死んだのだ。(p.150)

進歩のさなかにある西欧と対比される、無為懶惰な不動性のなかで硬直  
してしまったオリエント——それが当時の作家たちによって頻繁に呼び起  
こされる表象である。こうした歴史観はやがて19世紀後半になると、進歩



した西欧が遅れたオリエントを「文明化」という大義のもとに、植民地政策を正当化するイデオロギーにつながっていく。エドワード・サイードが刺激的な議論を展開してみせたこのテーマは、しかしながらまた別の問題である。

シャトーブリアンと違って、デュ・カンは巡礼の旅を敢行したのではないし、彼の東方旅行が宗教の起源に遡行する試みだったわけでもない。旅が通過儀礼ではなく、旅によって自らの深い内面性が劇的変化をこうむることがなかったという点で、彼はラマルチーヌのような作家と異なる。そしてネルヴァルとは逆に、彼は霊的、秘儀的な探究に無関心である。彼の関心を惹いたのは可視的なものであり、感覚的な細部だった。『ナイル河』を読むかぎり、デュ・カンにとってエジプトの風景は常に解釈可能で、ほとんど透明なまでに明澄だった。あるいはむしろ、エジプトの風景は作家がそれを馴致できるかぎりにおいて描かれ、語られた。ロマン主義的な夢と幻想のオリエントは、彼には無縁の表象だったということである。

## 注

- (1) 西洋絵画におけるオリエンタリズムの問題については、リンダ・ノックリン『絵画の政治学』坂上桂子訳、彩流社、1996年；稲賀繁美『絵画の東方』、名古屋大学出版会、1999年；Christine Peltre, *Les Orientalistes*, Hazan, 2000などを参照のこと。
- (2) Jean-Marie Carré, *Voyageurs et écrivains français en Egypte*, Le Caire, Imprimerie de l'Institut français d'archéologie orientale, 2vol., 1956, t.2, p.355.
- (3) Maxime Du Camp, *Le Nil*, Sand/Conti, 1987, p.80. 以下でこの作品を引用する際はこの刊本にもとづき、本文中にページ数を示す。

## 参考文献

- 竹沢尚一郎『表象の植民地帝国』、世界思想社、2001年  
工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説』、東京大学出版会、2003年  
Jean-Claude Berchet, *Le Voyage en Orient*, Robert Laffont, 1985.  
Sarga Moussa, *La Relation orientale*, Klincksieck, 1995.